

〔新釈〕 ウミサチヒコとヤマサチヒコ

藤 鈴嶋

むかしむかし、ホデリノミコトとホオリノミコトという、兄弟の様がいらつしやいました。兄のホデリノミコトは海に出て魚を釣ることが得意でしたので「ウミサチヒコ」と呼ばれていました。弟のホオリノミコトは山に入って獸を取ることが得意でしたので「ヤマサチヒコ」と呼ばれていました。二人の神様はそれぞれの国を治めながら、与えられた場所で、お父様のニニギノミコトにささげるお供え物を用意する仕事に精を出していました。

ある日のこと、弟のヤマサチヒコは兄のウミサチヒコの所にやってきて、こんな話を始めました。

「兄さん、たまには私も釣りをしてみたいんです。一度、竿と釣り針と、この弓矢をかえっこして、いつもとは違うところで獵をしてみませんか。」

実はヤマサチヒコは、海岸に座って釣り糸を垂れているだけのウミサチヒコのことを、のんきそうであらやましい、と思っていたのでした。

「いやあ、それは、おまえ・・・きつとうまくいかないよ。」

ウミサチヒコはあまり気が進まない様子でした。それでもヤマサチヒコは何度も何度も言い続けました。そこでウミサチヒコは

「それでは一度だけだぞ。」

としぶしぶ、道具と場所をかえっこすることにしたのでした。

釣竿を手にしたヤマサチヒコは、踊りだしそんな気持ちで海に出かけました。空は穏やかに晴れています。波は静かに打ち寄せています。この上ない絶好の釣り日和でした。

ところがどうしたかげんでしよう。いくら釣り糸を垂れて待ってみても、いくら場所を変えてみても、魚一匹釣り上げることはできませんでした。

その上、ウミサチヒコから借りた大切な釣り針を、ふとしたはずみにうっかり失くしてしまったのでした。

もうすっかり日が沈んでしまったころ、ヤマサチヒコはとぼとぼと帰ってきました。そこにウミサチヒコも山から下りて来ました。弟の姿を見つけたウミサチヒコは声をかけました。

「いやあ、まいったまいった、全くだめだったぞ。うさぎ一羽、はと一羽もとれなかった。おや、お前もだめだったようだね。やはりウミサチは海で、ヤマサチは山でがんばれということなんだよ。さあ、私の竿と釣り針を返してくれ。」

そう言って弓矢を差し出しました。

「あのう、実は、兄さん、私の不注意から、兄さんの大切な釣り針を失くしてしまつたんです。すみません。」

ヤマサチヒコは正直に話して、謝りました。するとウミサチヒコは、まるで火山が爆発したかのような激しさで怒り出したのでした。

「なんてことをしてくれたんだ。あの釣り針は特別な釣り針なんだぞ。どれだけ大きな魚がかかっても折れない。どれだけ魚が暴れても外れない。しかもできるだけ魚を傷つけないように、魂を込めて作つてあるんだ。あの釣り針一本を作るために、どれだけ年月をかけたと思っているんだ。」

「兄さん、本当にすみませんでした。」

「あの釣り針は天の世界にも地の世界にも、一本しかない大切な大切な釣り針なんだ。さあ、早く取りに行つて来い。」

「兄さん、本当に申し訳ないことをしました。本当にすみませんでした。でもこの広い海の中から、あの釣り針を見つけ出すことなんてできません。どうかお許し下さい。」

「だめだ、さあ、早くあの釣り針を探して来い。」

力任せに弓矢をヤマサチヒコに叩きつけると、ウミサチヒコはそのまま海岸の岩場にできた洞窟に閉じこもってしまいました。その怒りはおさまらず、洞窟からはゴーゴーと鳴り響く声が、昼とは言わず、夜とは言わず、鳴り響いていました。その恐ろしさに、海辺の生き物たちはもちろん、山の獣たちも安心して暮らしていけなくなるほどでした。

ひとり残されたヤマサチヒコは考えました。

「もとはといえば私が気まぐれなことを言い出したせいなんだ。そのせいで兄さんの大切な釣り針を失くしてしまったんだ。私が悪い。許してもらえないまで、精一杯謝り続けるしかない。」

そこで自分の大切な剣をつぶして、五百本の釣り針を作りました。そしてその釣り針を持ってウミサチヒコの居る洞窟にあやまりに行きました。

ところがその五百本の釣り針を見たウミサチヒコは、

「何だこんな釣り針、何の役にも立たない。私が返して欲しいのは、あの、私の釣り針だ。」

と、五百本の釣り針をあたりにぶちまけてしまいました。

しかたなくヤマサチヒコはさらにもう一本、自分の剣をつぶしてこんどは千本の釣り針を作り、それを差し出して心からのお詫びをしました。

それでもウミサチヒコは

「あの釣り針でないとだめだ。あの釣り針を返せ。」

と、千本の釣り針を受け取ろうともせず、激しい怒りをぶつけるばかりでした。

ほかによい方法も見つからず、困りきったヤマサチヒコは、海辺に座り込んでただただ泣くことしかできなくなっていました。

「もしもし、どうなされたのですか。」

優しく語りかける声にヤマサチヒコは顔を上げてみました。そこにはいたのは海の潮の流れの神様シオツチノミコトでした。ヤマサチヒコは今までの出来事をすべて正直にシオツチノミコトにお話しました。

「そうですか。それはお困りですね。あなたのような立派な神様がそのような争いごとで悩んでいらつしやるのはとても気の毒なことです。それに先ほどの恐ろしい声の正体もわかりました。波間に暮らす生き物たちはみんな震え上がっています。でも私にはどうする力もありません。これは海の神様でいらつしやるワタツミノカミのお助けをいただくのがよろしいでしょう。」

「良いことを教えていただいて有難うございます。でもその方にお会いするにはどこに行けばよいのでしょうか。」

「まず山の幸である竹を編んで舟をおつくり下さい。竹は月にも通じる不思議な力を持っています。あなたがその舟にお乗りになれば、私がおの舟を後押ししましょう。やがてりつぱな宮殿が見えてくるこ

とでしよう。ワタツミノカミの宮殿です。宮殿の井戸のそばに立派な桂の木が生えています。その木に登って待つてらっしゃれば、やがてご運は開かれるでしょう。」

ヤマサチヒコは言われた通りに竹を細かく編んで舟をつくりました。そしてその舟に乗り、船出の時を待ちました。時がきました。潮が満ちてきました。ヤマサチヒコを乗せた竹の舟は沖へ沖へとぐんぐん走り続けました。

そしてついに海に浮かぶワタツミノカミのりっぱな宮殿にたどり着いたのでした。

ヤマサチヒコは教えられた通りに井戸の近くの桂の木に登って様子を見ていました。するとそこに一人の女が現れました。手には美しい宝石でできた器を持っていました。女は水をくみ上げようとして、井戸の中をのぞきこみました。すると水面に映る光が見えたのでした。女はあわてて振り返り、空を見上げてみました。そこには一人の青年の姿があったのです。

ヤマサチヒコは桂の木から降りて女に話しかけました。

「水を一杯いただきたい。」

女があわてて手にしていた器に水を入れて差し出しました。ところがヤマサチヒコは水を飲むとはしませんでした。首にかけていた玉飾りをほどこいて、その一つの宝石を口に含み、器の中に吹き入れました。するとその宝石は器にくっついてしまいました。女が取ろうとしても宝石は器から離れませんでした。女は不思議に思いながら、そのまま器をワタツミノカミの娘であるトヤマビメノミコトにお見せしました。

トヤマビメノミコトは女から話を聞き、外に出てみました。井戸の近くに立つヤマサチヒコの姿を一目見て、そのりっぱな姿に心を動かされてしまいました。そして頬を赤く染めながら、すぐさま男神であるワタツミノカミに報告したのです。

「お父様、私の家の入り口に立派な方がいらつしやいます。」

ワタツミノカミはすこし眉を寄せました。娘の言う男の様子を自分の目で確かめてやろうと、宮殿の外に出てみました。そしてヤマサチヒコの姿を見て、驚きの声を上げたのです。

「おお、なんとすばらしいことだ。この青年はまさしくアマテラスオオミカミの御子孫、ニギノミコトのご子息に違いない。この方が将来、国造りという大きな仕事をされる方だ。その方がわが宮殿にお越しになられるとは。ああ、なんとめでたいことだ。」

自らヤマサチヒコの手を引いて、宮殿の中に招き入れました。敷物を何枚も何枚も重ねて敷いて、たくさんの祝いの料理も用意させました。そして恥らう若い二人の背中をおしながら、あれよあれよというまに、結婚式を挙げてしまったのでした。

そして三年、ヤマサチヒコはこの宮殿で暮らしたのでした。

二人の幸せな日々が続いたある夜のこと。ふと目をさましたトヤマビメノミコトは、ひとり窓辺に座って遠くを見ながら、深いため息をついているヤマサチヒコの姿を見つけたのでした。不安になったトヤマビメノミコトは男神に相談しました。ワタツミノミコトも不安にかられて、ヤマサチヒコを呼んで話かけました。

「今朝娘から話を聞きました。この三年、あなたがため息をつかれる様子など見たことが無いのに、昨夜はおひとりで深いため息をつか

れている姿を拝見したそうです。何かお悩みのことでもあるのでしょうか。そもそもあなたがこの国に来られたのには、なにかわけでもあったのでしょうか。」

問われてヤマサチヒコは今までのいきさつをすべてお話しました。そして心の内をお話しました。

「私はまだ、兄に許してもらっていません。自分の国の人々もそのままにきました。それなのに自分だけがこんな幸せな暮らしをしていてよいものでしょうか。かといって……姫を一人にすることも……」そこでワタツミノカミは海に居るすべての魚を呼び集め、釣り針のありかを尋ねました。するとタイが前に進み出て話しました。

「実は……私は……この間から……のどに骨のようなものが……刺さって……うまく物が食べられないのです。」

「どれ、見せて御覧なさい。」

ワタツミノカミはタイののどの奥を探り、一本の光り輝く釣り針を取り出しました。釣り針をきれいに洗って清めたあと、ヤマサチヒコに渡しました。

「さあ、この釣り針を持って元の国にお帰り下さい。しかしお兄様には少しお心を入れ替えて頂かなくてはならないようです。お兄様ご自身のためにも、あなたのためにも。そして国の人々のためにも。この釣り針をお兄様にお渡しになるとき、『この釣り針はおぼち、すすち、まづち、うるち』と言って、後ろ向きに手渡しして下さい。そののち、お兄様が高い土地に田畑を作られたら、あなたは低い土地に田畑をお作り下さい。お兄様が低い土地に田畑を作られたら、あなたは高い土地に田畑をお作り下さい。私はすべての水を支配しています。きつとあなたの田畑にだけ水を回すようにします。そうすれば三年で

お兄様は貧しくなるでしょう。もしお兄様がそのことであなたを恨んで攻めてくることがあれば、このシオミチノタマを出して、お兄様をおぼれさせなさい。そしてもしお兄様が謝れば、このシオヒノタマを出して、お兄様を救ってあげてください。後はご兄弟のこと。よくお話し合いをなさって下さい。」

そして、魚たちのほうに振り返り、

「この方を速く安全にお送りすることが出来るもはいるか。」

そう尋ねると今度は一匹のサメが前に進み出ました。

「私なら一日で行って帰って参ります。」

「それならばお前に頼もう。くれぐれも恐ろしい思いをさせないよに。」

そう言ってヤマサチヒコをサメの背に乗せて送り出したのでした。

三年ぶりに兄弟は再会しました。

「この釣り針はおぼち、すすち、まづち、うるち。」

ヤマサチヒコは釣り針をウミサチヒコに、後ろ向きで手渡しました。そしてその後も教えられたとおりのことを行いました。

ヤマサチヒコの国は豊かになりました。平和に暮らす人々の笑顔を見ることが最高の喜びだと、ヤマサチヒコは知ることができました。

一方のウミサチヒコの国は貧しくなりました。ヤマサチヒコをうらやましく思い、そして恨むようにさえなりました。ウミサチヒコとその国の人々は、荒々しい心の持ち主になってしまったのです。

そして多くの兵を従えて、ヤマサチヒコの国に攻め込んできたのでした。

「ヤマサチヒコ、もうお前の国は完全に征服したぞ。さあ、もう観

念してこの国を私に譲るんだ。」

「兄さん。気の毒だけど、観念するのは兄さんの方です。」

と、シオミチノタマを取り出しました。するとシオミチノタマからは水柱が激しく渦巻いて噴き出し、ウミサチヒコの体にぐるぐると巻きついたので。ウミサチヒコは息をすることもできず、おぼれそうになりました。

「苦しい、た、助けてくれ。悪かった、許してくれ、助けてくれ。」

「兄さん、もう私の国を力で奪おうとするようなことはしませんか。」

「しない、しない、もう絶対しない、頼む、助けてくれ。許してくれ。」

「兄さん、本当ですね。」

「本当だ、約束する、早く助けてくれ。」

「わかりました。」

と、今度はシオヒノタマを取り出しました。するとウミサチヒコの体に巻きついていて水の流れは、たちまちのうちにそのシオヒノタマの中に吸い込まれていったのでした。

「ああ、助かった。ヤマサチヒコ、ありがとう。私が悪かった。お前の国ばかり豊かになるのがうらやましくて、とうとう兵を挙げて襲うようなことをしてしまった。本当にすまないことをした。今の水の流れが、私の汚れた心を洗い清めてくれたようだ。今はものごとがはっきり見える。思えばあの釣り針のこと。いくら大切な釣り針だとしても、あまりにもお前を責めすぎた。無理難題を押し付けた。申し訳ない。」

「いえ、兄さん。あれはもとはと言えば私が気まぐれな心を起こし

たことが原因ですから。あらためてお詫びします。」

「いやいや、私はあまりにも物にこだわりすぎた。物に執着心を持ちすぎたのだ。そして大切なものが見えなくなっていた。いくらお前の気まぐれと不注意が原因だとしても、私には恕す心がみじんもなかった。悪いのはお前だと裁くことしかしなかった。お前の心を思いやるような広い心が全くなかったのだ。恥ずかしいばかりだ。」

「兄さん、あの時の私には、自分の役割や使命を果たす覚悟ができていませんでした。だから気まぐれを起こしたり、大切なものを失くしたりしたんです。大切な兄さんの大切な宝を。お恥ずかしい。申し訳ありません。」

「ヤマサチヒコ、今のお前は海の神の力も得て、山と海をまとめる力が具わったようだ。どうか私の国も治めてくれ。海の幸と山の幸とを一つにまとめて、豊かな国づくりに励んでくれ。そしてもし許されるなら、私を家来にしてくれまいか。私はお前の手足となって、豊かで美しい国を作るために精一杯の努力をしたいと思っている。」

「ありがとう、兄さん。よろしくお願いします。」

そこはやはり兄弟のこと。力強く結ばれた手と手の絆は、もうなにも者も切り離すことはできないものとなりました。

こののち、トヨタマビメノミコトはお腹にヤマサチヒコの御子を宿して、地上を訪れます。その御子が神武天皇のご先祖様となられるのです。

こうして日本の豊かで美しい国づくりは、また一步、前に進められることになったのでした。

